

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	1
1. 文学部、理学部、生活環境学部、人間文化研究科	3

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況		研究成果の状況	
文学部、理学部、生活環境学部、人間文化研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある

1. 文学部、理学部、生活環境学部、人間文化研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 4)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 理学系の研究に関しては、第3期中期目標期間中（平成28～令和元年）の総論文数（Scopus調べ）は619報で奈良女子大学全体（831報）の約3/4を占め、特に最近の2年間は増加の傾向が顕著である。この中で、FWCIのTop10%論文は10.8%、CIのTop10%論文は19.4%で研究水準の高さが示されている。また、FWCI平均値は全体で1.18と世界平均を上回っている。
- 平成28～令和元年度までの企業、自治体、国内外の研究機関との間における共同研究の実績は134件、150,496千円に達しており、既に第2期中期目標期間における実績（117件、132,016千円）を上回っている。

〔特色ある点〕

- 若手研究者の養成のため、35歳以下の常勤助教に対し、最大3年間メンターチームを配置し適切な指導助言を行う「若手研究者サポートシステム」を運用している。令和元年度に在籍するメンター配置を受けた23名の現況について、学内で昇任した者が4名いるほか、21名がメンター配置期間中又は終了後に外部資金を獲得しており、当該システムが一定の効果を挙げていると評価できる。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、8件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。